論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博　士　（　心　理　学　）	氏名	黄　　正　　国
学位授与の要件	学位規則第４条第①・２項該当		

論　文　題　目

地域がん患者会の援助機能に関する心理学的研究

論文審査担当者

主　　査	教　授	兒　玉　憲　一
審査委員	教　授	岡　本　祐　子
審査委員	教　授	中　條　和　光

〔論文審査の要旨〕

がん治療の急速な進歩に伴い，がん患者の生存率は大幅に上昇し，その多くは病院ではなく地域社会で生活している。地域がん患者会（以下，がん患者会）は，地域で暮らすがん体験者の心のケアの受け皿として注目されている。しかし，日本のがん患者会の全国規模の実態，会の援助機能の評価方法，さらには参加者の心理的適応の指標等の研究はいまだ十分とは言えない。

本論文は，がん患者会の自己評価・自己点検に資するため，全国的な活動の実態を明らかにすることを第 1 の目的，参加者は会の援助機能をどのように評価しているかを明らかにすることを第 2 の目的，参加者は会の活動を通して自己認識の肯定的な変化をどのように体験しているかを明らかにすることを第 3 の目的，さらには参加者の会の援助機能評価と肯定的な自己認識の変化の間にはどのような関連があるかを明らかにすることを第 4 の目的とした。

本論文は，第 1 章から第 3 章までの 3 章で構成されている。以下に各章の内容を記す。

第 1 章「背景と目的」では，がん患者会の援助機能やがん体験者の心理的適応に関する医学，看護学，心理学の研究が展望された後で，がん患者会の援助機能の評価方法やがん体験者の心理的適応の指標の先行研究の動向や問題点が検討された。その結果，①多様な参加者及び活動内容から成るがん患者会の援助機能を評価するために，参加者による独自の援助機能評価尺度を開発する必要があること，②会の参加者の心理的適応の指標として従来の否定的指標ではなく肯定的指標，特に自己認識の肯定的変化を測定するベネフィット・ファインディング（BF）尺度を作成する必要があることが述べられた後で，本論文の目的が明らかにされた。

第 2 章「地域がん患者会の援助機能評価と参加者の心理的適応との関連」では，上述の目的のために行われた研究 1 から研究 4 について述べられている。

第 1 節「全国の地域がん患者会の構成と活動（研究 1)」の研究 1-1 では，第 1 の目的のために，全国のがん患者会代表者を対象に質問紙調査を行い，会の構成と活動内容，運営，活動形態等を調べた。その結果，分析対象となった 119 団体は，北海道から沖縄県まで全国に及び，会の規模は大小様々だが，乳がん患者会が 6 割を占めた。活動内容は，「語り合いの会」，「勉強会」，「会報の発行」の順に多かった。研究 1-2 で，会の参加者を対象に質

問紙調査を行い，参加者の属性や参加した活動内容等を調べた。その結果，分析対象となった 573 名の内訳は，平均年齢 60.4 歳，9 割が女性，乳がん患者が 6 割で，多くの参加者が「患者同士の語り合いの会」など 5 種類以上の活動に参加していることが明らかになった。

第 2 節「参加者による地域がん患者会の援助機能評価尺度の作成と関連要因の検討（研究 2)」では，第 2 の目的のために，研究 2-1 で参加者による患者会の援助機能評価尺度が作成された。この尺度は,「学ぶ場としての機能」,「支え合う場としての機能」,「社会参加の場としての機能」,「自己成長を促進する場としての機能」の 4 下位尺度から成り，信頼性と妥当性が確認された。研究 2-2 では，本尺度は，性別，がんの種類，会の役職担当の有無，参加頻度，参加活動数などの要因が関連することが明らかになった。

第 3 節「地域がん患者会参加者用ベネフィット・ファインディング尺度の作成と関連要因の検討（研究 3)」では，第 3 の目的のために，がん患者会参加者用 BF 尺度が作成された。本尺度は,「肯定的人生観の獲得」,「人間としての人格的な成長」,「家族への愛情の深まり」,「友人関係の広がり」,「感謝の念の深まり」,「宗教心の活性化」の 6 下位尺度から成り，信頼性と妥当性が確認された。また，本尺度は，参加者の年齢，罹患年数，会への参加状況，役職担当経験と関連することが明らかになった。

第 4 節「地域がん患者会参加者による会の援助機能評価とベネフィット・ファインディングとの関連（研究 4)」では，第 4 の目的のために，参加者の属性や参加状況等の変数が援助機能評価と BF との関連にどのように関連しているかを検討した。その結果，年齢が 64 歳以下，罹患年数が 11 年以上，参加状況が積極的，役職担当ありの群がそうでない群より会の援助機能を高く評価し，自己認識の肯定的変化を多く体験していることが明らかになった。

第 3 章「総合考察」では，本研究の成果と意義が総合的に考察された。また，今後の課題として，両尺度が汎用性を得るために，乳がん患者会だけでなく他のがん患者会の参加者のデータを広範に収集するため，全国がん患者会のリストを拡充すること，会の援助機能評価尺度を充実させるために，活動中の参加者だけでなく退会あるいは休会した参加者も対象とした調査を行う必要があることなどが考察された。

本論文は，臨床心理学，特にがん患者会の援助機能に関する研究として，次の 3 点で高く評価できる。

(1) 全国のがん患者会代表者及び参加者に質問紙調査を行い，会の規模，活動内容，参加者の参加状況等の実態を初めて明らかにした点。
(2) 参加者による会の援助機能評価尺度を作成し，会の援助機能を数量的に評価する方法を開発した点。
(3) がん患者会参加者用 BF 尺度日本語版を作成し，長期生存者を多く含む参加者の心理的適応の新たな指標を提示するとともに，参加者の心理的適応と会の援助機能との関連を検討する方法を開発した点。

以上，審査の結果，本論文の著者は博士（心理学）の学位を授与されるに十分な資格があるものと認められる。

平成２６年２月１８日